

流るゝ雲 (八十四)

寺澤琴風

新刊書

櫻井菊三

各科白人名醫紹介

醤油中の醤油

(日曜火) 日四廿九正大 (八)



質一は、長火鉢の前に、グッタリ首を垂れた。夫をどう慰め、又どう話しかけて宜いのか、解らぬいた。孔の熱いたやうな淋しみが、二人の胸を往來した。
「お詫びを願ひとうござります」
申上げるのは、誠に失禮でござりますが、これまでの事は奥様に成り代つて、た詫いたしまずから、お詫び願ひとうござります。

「ああ、貴方、

私がも斯様なことを申上げます」

「これまでの事は奥

様に成り代つて、た詫いたしま

すから、お詫び願ひとうござります」

「馬鹿。貴様を言ひ頗りういふことは、今後一切、僕の前で言ふと承知しないぞ」

「でも

「蒼蠅い」

「では、貴方、

私がも斯様なことを申上げます」

「大事の場合は、今が

大抵の風に、キツ

となつて、斯う

言ひかけると、

質一は、

「黙れ。諒い

やないか。そん

で、一切する事

があれはと言ふ

のに、其がた

前途に感解らな

いのか。でも、

たつて言ふのな

ら、二人共此の

家に置くことは

出来ないから、出で行つてくれ

と、蒼々しく言つて、更に、

「オイ、咲は、酒を持って來い。

と右の肩を突き出すやうにし

て言つた。

と左の肩を突き出すやうにし

て言つた。

と、蒼々しく言つて、更に、

「オイ、咲は、酒を持って來い。

と右の肩を突き出すやうにし

て言つた。

と左の肩を突き出すやうにし